

中度知的障害者への買い物支援

17cc07 加藤 なつ美

I. はじめに

私は障害者支援施設で、中度知的障害で左上下肢機能障害のある A 様と出会った。残存機能に着目した活動や、買い物に行きたいというニーズに着目して介護過程を展開した。

買い物支援を通して A 様は、自分がいくら使い、いくら残ったのか、物の価値観を理解できないという場面があった。なぜ自分でお金を出して計算できなかったのかを考えるきっかけとなった。

現在わが国では、知的な障害のある人について明白な定義があるわけではない。しかし、知的障害とは「知的機能の障害が発達期（おおむね十八歳まで）に現れ、適応行動の困難が伴うこと」である。¹⁾

知的障害のある人が他にどのような金銭管理上の悩みや困り事を抱えているのかに着目し再察する。

II. 実習先種別・実習期間

実習先種別：障害者支援施設

実習期間：2018 年 6 月 25 日～7 月 27 日（23 日間）

III. 受け持ち利用者の紹介

氏名：A 様 性別：女性 年齢：70 代後半

介護が必要になった主な疾患・障害：中度知的障害・左上下肢機能障害・骨粗鬆症

- ADL：
- 1 入浴・排泄において一部介助
 - 2 食事は常食であり自力摂取
 - 3 夜間良眠、朝起きるのがつらい
 - 4 移動は車椅子で右上下肢を使って自走

IV. 介護の実際

1. 情報の解釈・関連づけ・統合

日中はフロアと居室内で過ごし活動的に取り組んでいることはない。

買い物に行きたいという気持ちはあるが、売り場まで自分から向かい物を買うことはない。現在、金銭管理は A 様のご家族が生活費を施設へ届けられ、それを職員が管理している。A 様は自分でお金を計算し支払いすることができないため、必要なときに職員が A 様の代わりに支払いを行う。また、「お金を使いすぎてはいけない」という不安感があり満足に買い物を楽しめていない。

2 介護上の課題：買い物を日常の楽しみの一つにし、生活を充実する必要がある

3 介護計画

長期目標：生活に右上下肢の残存機能を活かした活動ができる

短期目標：自己選択・自己決定ができるようになる

具体的援助内容

- ① 商品名、使用金額、残高が明白に記載されたお小遣い帳を作成する
- ② お小遣い帳を使って金銭管理及び理解をし、不安軽減を図り、買い物を楽しんでいたできるようにする

4. 実施及び結果

- ① A 様自身で作成されるのは難しいため、計画者が作成した。作成した物を渡すと「見やすく良いですね」と喜ばれた。
- ② 買ったもの、使用額、残高を記すことを説明し実際に居室内で書く練習をした。しかし A 様がペンを持ち記帳することは出来なかった。不安軽減は図れなかったが買い物を楽しんでもらえた。

- ・「一本 100 円のジュースがあります。200 円で何本買えますか？」の質問に対し A 様は「分かりませんね」と答えた
- ・A 様が定期的に購入されている飲料水に着目し「この飲み物は一本いくらですか？」と質問したところ「分からない」と答えた

このことから A 様は自分で定期購入されている飲料水をはじめ金額の把握ができておらず、また物への価値観もなくお金の理解が難しいことが分かった。

これにより A 様自身でお小遣い帳の記帳をし、自分でお金を出して計算し購入するといった行為は難しく、不安軽減にはもう少し時間がかかりそうだ。しかしお小遣い帳への反応は良く、買い物への誘いも前向きであった。

買い物を日常の一つにして習慣づけることは出来なかったが、実際に売り場まで向かい商品を手にとって見ることで楽しさを感じていただけたのではないかと考える。

V. 考察

なぜ A 様はお金の計算や自分がいくら使い、いくら残っているのかが理解できなかったのか。仮定の一つとして知的障害の特徴である発達の遅れからくるものではないかと考える。

本来買い物とは、物を選ぶ、計算する、残高確認などいくつかの過程を経て行われる IADL である。あたり前に行われている生活行為だが複雑な過程である。

鹿野 (2016) は、知的障害のある人は、同年齢の人の平均と比べて知的な働きや発達がゆっくりしている。知識を増やしていくことが一般の人よりも円滑にいかない。ゆっくりと丁

寧に何度も繰り返して経験することで「できること」が増えていく。「もらう」「使う」の体験を積み重ね金銭管理能力を身に着ける必要がある²⁾と述べている。

このことを踏まえると、ゆっくりとした発達の中で繰り返し行われる営みは経験を通して獲得していく必要がある。

今回の事例では A 様はお金の使い方を習得しないまま大人へと成長したのではないかと考える。

金銭感覚を身に着けるためにはトレーニングを通して「いつ」「何に」「いくら」必要かという 3 つのポイントを明確にすることが必要である。¹⁾

VI. おわりに

今回 A 様の買い物支援を通して、なぜ自分でお金を出して計算できなかったのかを考え、お金の計算を自分で行い習得するためには繰り返し何度も丁寧に行うことが大切だと気づいた。知的な働きや発達がゆっくりしていることを前提に、時間をかけて相手と向き合う必要性を感じた。もう少し早い段階でニーズを発見し A 様の買い物支援を時間をかけて、そして分かりやすく支援したかったと振り返る。

しかし、普段あたり前に行っていることも障害者にとっては貴重な体験であり、果たすことが難しいと学んだ。

多くの学びを与えてくださった利用者に感謝の気持ちを込め、今後も障害分野に興味を持ち、さらに精進していきたい。

引用・参考文献

1) 二井るり子他 (2003)「知的障害のある人のためのバリアフリーデザイン」彰国社出版 p. 12

2) 鹿野佐代子・前野 (2016)「今日からできる！障がいのある子のお金トレーニング」翔泳社出版 p・27 28 68